※令和４年度以降入学生用

学校番号	316

令和８年度　理科

教科	理科	科目	（学）化学演習	単位数	2 単位	年次	3 年次
使用教科書							
副教材等	新課程　大学入学共通テスト対策　チェック＆演習　化学　(数研出版) 新課程版　セミナー化学基礎＋化学　　(第一学習社) 新課程二訂版　スクエア最新図説化学　　(第一学習社)						

1　担当者からのメッセージ（学習方法等）

化学は物質を学ぶ科目です。化学基礎および化学の学びを深めます。化学が身近な学問であることを実感し、科学的に探究する力を養ってほしいと思います。「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点で評価をします。

2　学習の到達目標

物質とその変化に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、物質とその変化を科学的に探究するために必要な資質・ 能力を次のとおり育成することを目指す。
(1) 日常生活や社会との関連を図りながら、物質とその変化について理解するとともに、科学的に探究するために必要な観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
(2) 観察、実験などを行い、科学的に探究する力を養う。
(3) 物質とその変化に主体的に関わり、科学的に探究しようとする態度を養う。

3　評価の観点及びその趣旨

観点	a:知識・技能	b:思考・判断・表現	c:主体的に学習に取り組む態度
観点の趣旨	自然の事物・現象について、基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。 観察、実験を行い、実験操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理し、自然の事物・現象を科学的に探究する技能を身に付けている。	習得した知識・技能を活用し、自然の事物・現象の中に課題を見出し、科学的に考察し、解決する思考力や、導き出した考えを的確に表現する力を身に付けている。	知識・技能の習得や思考力・判断力・表現力などを身につける過程において、粘り強く学習に取り組んでおり、自ら学習を調整しようとしている。
上に示す観点に基づいて、学習のまとまりごとに評価し、学年末に５段階の評定にまとめます。学習内容に応じて、それぞれの観点を適切に配分し、評価します。			

※令和４年度以降入学生用

４　学習の活動

学期	単元名	学習内容	単元(題材)の評価規準	評価方法		
				知(a)	思(b)	主(c)
1学期	序章:化学の特徴		a:設定したテーマについて情報を収集して仮説を立て、実験を実施することができる。 b:実験の結果を分析・考察することができる。 c:身近な出来事に疑問をもち、化学の探究の進め方に興味をもち、主体的に取り組んでいる。	定期考査	定期考査 観察・実験 レポート	観察・実験 探究活動 レポート 振り返り
	第1編　物質の構成と化学結合 第1章　物質の構成	1 純物質と混合物	a:混合物を分離する操作として、ろ過、蒸留、分留、昇華法、再結晶、抽出、クロマトグラフィーなどの方法をあげることができる。実際にそれらの方法を適切に用いて混合物を適切に分離することができる。 b:純物質と混合物の違いが何であるか説明できる。物質を分離する操作がどのようなものであるかを説明することができる。 c:身のまわりの物質が純物質と混合物に分類されることに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		2 物質とその成分	a:炭素、酸素、リン、硫黄の同素体をあげることができる。代表的な成分元素について検出法を理解し、実験を実施することができる。 b:いろいろな物質を単体と化合物に分類することができる。単体と化合物の違いについて説明することができる。 c:元素の概念に興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		3 物質の三態と熱運動	a:物質の状態と熱運動の関係を理解している。物質の三態について、熱運動のようすを踏まえて説明することができる。 b:物質を加熱したり冷却したりしたときの温度変化をグラフに表すことができる。 c:日常生活の中の物質の状態変化について興味をもち、主体的に取り組んでいる。			

※令和４年度以降入学生用

	第２章　物質の構成粒子	1 原子とその構造	a:原子の構成粒子である陽子・中性子・電子の個数・電荷・質量の関係について理解している。 b:原子について、どのような粒子から構成されているかを説明することができる。どのような原子が安定であるか、電子配置に基づいて説明できる。 c:原子がいくつかの粒子から構成されていることに気づく。同じ元素でも粒子の構成が異なるものがあることに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		2 イオン	a:単原子イオンの電子配置を模型により示すことができる。イオン化エネルギーの概念を説明できる。 b:原子の電子配置から、その原子がどのようなイオンになりやすいかを判断できる。イオンのなりやすさについてイオン化エネルギーや電子親和力の値の大小と関連させて考えることができる。 c:原子とイオンの違いについて疑問をもつ。			
		3 周期表	a:元素の、典型・遷移、金属・非金属、陽性・陰性などの分布、および同族元素について理解している。 b:周期表の中に周期律が見いだせること、周期律は価電子の数の周期的な変化によることに気づき、価電子の数と化学的性質の関連について説明できる。 c:各元素の特徴および周期表上の元素の配列について興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
	第３章　粒子の結合	1 イオン結合とイオン結晶	a:イオン結晶を構成する陽イオンと陰イオンの種類から、イオン結晶の名称と組成式をかく方法を理解している。イオンからなる物質の特徴を示すことができる。 b:イオン結晶中のイオンの配置を示した模型およびイオン結晶の性質について説明することができる。 c:身のまわりにあるイオン結晶の性質に興味をもち、主体的に取り組んでいる。			

※令和４年度以降入学生用

		2 共有結合と分子	a:共有結合とはどのような結合であるか説明できる。さまざまな分子を電子式、構造式で表しその構造を考えることができる。 b:原子間の共有結合を考えることによって分子の構造を予想することができる。 c:身のまわりにある分子からなる物質の成りたちについて興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		3 分子間にはたらく力	a:配位結合が含まれる錯イオンの成りたちを理解している。 b:塩化アンモニウムの結晶にどのような結合があるかを説明できる。 c:通常の共有結合とはできるしくみの異なる配位結合について興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		4 高分子化合物	a:極性を電気陰性度の違いによる電荷のかたよりと分子の形から理解している。極性分子と無極性分子の性質の差異を実験により確認することができる。 b:分子の形を予想して、極性分子と無極性分子に分類できる。分子間力や分子結晶の性質を説明することができる。 c:分子には極性分子と無極性分子があることに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		5 共有結合の結晶	a:共有結合の結晶の構造や粒子間にはたらく力とその性質の関係を理解している。ダイヤモンドや黒鉛中の原子の結合を、分子模型などを使って表せる。 b:共有結合の結晶の性質を、共有結合の強さ、結晶構造、電子の移動をもとに説明できる。分子結晶との違いについて説明できる。 c:共有結合の結晶にどのような物質があるかに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			

※令和４年度以降入学生用

		6 金属結合と金属結晶	a:金属もイオン結晶や共有結合の結晶と同じように組成式で表されることを理解している。金属の特徴を実験で示すことができる。 b:金属特有の性質が自由電子によるものであることに気づき、金属結合および金属結晶の性質について説明できる。 c:金属特有の性質に興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
	第２編　物質の変化 第１章　物質量と化学反応式	1 原子量・分子量・式量	a:原子量・分子量・式量の定義を示すことができる。原子の相対質量をもとに、分子や分子をつくらないものの質量を考えることができる。 b:異なる質量の原子が混在する場合、その平均の質量を表す方法を見いだすことができる。 c:同じ原子でも異なる質量をもつものがあることに興味をもち、主体的に取り組んでいる。原子１個がいかに小さなものであるかを実感する。			
		2 物質量	a:同温・同圧の気体の場合、1mol の体積が共通であることを理解する。実際の物質の 1mol 分の量を示すことができる。実際の物質の量を物質量で表せる。 b:ある質量の物質の中に、原子や分子などが何個含まれているかを考えることができる。モル質量の概念を使い、粒子の数・質量と物質量に関する計算ができる。 c:多数の粒子を数えることは困難なので、まとめて扱うことが便利だということに気づく。物質量の概念について興味をもち、粒子の数・質量・気体の体積との関係について説明できる。			
		3 溶液の濃度	a:濃度の表し方について、いろいろな方法があることを理解している。目的の濃度の水溶液を調製することができる。 b:2 種類の濃度の求め方を理解し、その換算ができる。 c:溶液の濃さの表し方について興味をもち、主体的に取り組んでいる。			

※令和４年度以降入学生用

		4 化学反応式と物質量	a:化学反応における、物質量、粒子の数、質量、気体の体積などの量的な関係を、化学反応式から読み取ることができる。化学反応式を用いて量的な計算を行うことができる。原子説の発見、分子説の発見にいたる物質探究の歴史を学び、化学の基礎法則を理解する。 b:正しい化学反応式が表せる。化学反応式の係数から、物質の量的変化を質量や気体の体積変化でとらえることができる。 c:多くの化学変化は化学反応式で表されることがわかる。化学反応式をもとに量的な関係をつかむことができる。			
	第２章　酸と塩基の反応	1 酸・塩基	a:酸・塩基の価数、電離度などの考え方があることを理解し、説明できる。H^+の授受が実際に行われている反応を確かめることができる。 b:酸・塩基の性質を H^+と OH^-で考える方法と、H^+の授受で考える方法から酸と塩基を見きわめられる。 c:酸とは何か、塩基とは何かに関心をもつ。			
		2 水素イオン濃度とpH	a:水溶液中のH^+の濃度をpHで表す方法を理解している。身のまわりの物質の水溶液のpHを知る方法を身につけている。 b:pH の値から酸性、塩基性の強弱が判断できる。水素イオン濃度と水酸化物イオン濃度の関係を用いて、水酸化物イオン濃度からpHを求めることができる。 c:水もまた一部が電離しているということに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		3 中和反応と塩	a:中和反応を化学反応式で表すことができる。酸性塩・塩基性塩・正塩などの分類について理解している。 b:塩の水溶液の酸性・中性・塩基性を判断し、説明することができる。 c:中和反応が本質的に H^+と OH^-の反応であることに気づく。			

※令和４年度以降入学生用

		4 中和滴定	a:未知の酸や塩基の濃度を、既知の塩基や酸を用いた中和滴定により測定することができる。中和滴定で使用するホールピペット、ビュレット、メスフラスコなどの器具を正しく扱うことができる。 b:中和の量的関係を数式で表すことができる。滴定曲線における pH 変化、中和点、使用できる指示薬について理解している。 c:酸・塩基の価数が中和の際の量的関係において重要であることに気づく。			
	第３章 酸化還元反応	1 酸化と還元	a:電子の授受が酸化還元反応の本質であることを理解している。 b:酸化還元反応に必ず電子の移動が伴うことに気づく。酸化数を求めることによって酸化還元反応を区別することができるようになる。 c:酸素を受け取ることが酸化、酸素を失うことが還元であることに気づく。			
		2 酸化剤と還元剤	a:酸化還元反応の量的関係を数値計算により求めることができる。酸化還元反応の進行を、色の変化などの視覚的な情報をもとに判断できるようになる。 b:酸化還元反応の化学反応式を、酸化剤・還元剤のはたらきを示す反応式からつくれるようになる。酸化還元反応における酸化剤と還元剤のはたらきを電子の授受に着目して説明できる。 c:酸化還元反応の複雑な化学反応式も、そのもととなる反応式と電子の授受を考えることによって完成させることができる。			
		3 金属の酸化還元反応	a:通常の酸と反応する金属と、王水や酸化力をもつ酸とのみ反応する金属との違いを理解している。金属がイオンになる場合のなりやすさを利用して、金属を加工できる。 b:金属のイオン化が電子を放出する酸化還元反応であることに気づく。金属固有の性質をイオン化傾向で考えることができるようになる。 c:金属樹ができることに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			

※令和４年度以降入学生用

		4 酸化還元反応の利用	a:金属の製錬の方法について理解している。簡単な電池をつくることができる。 b:電池や金属の製錬が酸化還元反応を利用したものであることに気づく。電池の基本的なしくみについて、イオン化傾向や電子の授受に着目して説明できる。 c:身近にある電池の構造や反応のしくみに興味を示す。			
2学期	第1編 物質の状態 第1章 固体の構造	1.結晶とアモルファス	a:単位格子や配位数の意味について理解する。 b:結晶質と非晶質の構造の違いを説明できる。 c:身近な物質でアモルファスになるものは何があるか興味をもつ。	定期考査	定期考査 観察・実験 レポート	観察・実験 探究活動 レポート 振り返り
		2.金属結晶	a:金属の結晶格子の名称や配位数，単位格子中の原子の数，充填率について理解をしている。単位格子の一辺の長さから金属の原子半径を求める方法を理解する。 b:金属の結晶格子の名称や配位数，単位格子中の原子の数，充填率を説明できる。単位格子の一辺の長さから金属の原子半径を求める方法を説明できる。結晶格子に関する知識を用い，密度を求めることができる。 c:金属の結晶格子における原子の配列の仕方に興味をもつ。			
		3.イオン結晶	a: NaCl 型，CsCl 型，ZnS 型の結晶格子について，配位数，単位格子中のイオンの数，組成式について理解をしている。 b:イオン結晶の違いについて，結晶格子中の配位数やイオンの数に着目しながら説明できる。 c:イオン結晶について興味をもち，CaF_2等の結晶格子についても理解する。			

※令和４年度以降入学生用

		4.分子間力と分子結晶	a:分子間力にはファンデルワールス力や水素結合があることを理解する。分子間力と物質の沸点に関係があることを理解する。 b:水素化合物の分子量と沸点の関係について理解する。水素化合物の分子量と沸点の関係を説明できる。 c:物質の沸点に興味をもつ。			
		5.共有結合の結晶	a:ダイヤモンドの結晶格子について，配位数，単位格子中の炭素原子の数について理解をしている。 b:ダイヤモンドと黒鉛の性質について，結晶構造に基づきながら説明できる。 c:共有結合の結晶に興味をもつ。			
	第２章　物質の状態変化	1 粒子の熱運動	a:気体分子の熱運動と運動エネルギー，温度の関係について理解する。 b:気体分子の熱運動と運動エネルギー，温度の関係について説明できる。 c:粒子の熱運動に興味をもつ。			
		2.三態の変化とエネルギー	a:状態変化の際に放出または吸収するエネルギーの名称を理解する。加熱による物質の温度変化を表した図において，グラフと物質の状態の関係を理解する。物質を構成する粒子間にはたらく力の大小について理解する。 b:加熱による物質の温度変化を表した図において，融解熱や蒸発熱にあたる部分を判断することができる。加熱による物質の温度変化を表した図において，グラフの形について説明できる。比熱や融解熱，蒸発熱を用いて状態変化に必要な熱量を計算することができる。 c:物質の状態変化について興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

		3.気液平衡と蒸気圧	a:大気圧に関して，単位を含めて理解をしている。気液平衡の考え方を理解する。蒸気圧および蒸気圧曲線について理解する。蒸気圧と沸騰の関係について理解する。状態図は物質のある温度・圧力における三態を表したものであり，それぞれの曲線や点の名称について理解する。 b:蒸気圧曲線から物質の蒸気圧や沸点を判断することができる。状態図を用いることで，ある温度・圧力における物質の状態を判断することができる。 c:大気圧や蒸気圧，状態図について興味をもつ。			
	第３章　気体	1.気体の体積	a:気体の体積や圧力，絶対温度について理解する。ボイルの法則，シャルルの法則，ボイル・シャルルの法則を理解し，それらの式を用いることができる。 b:ボイルの法則，シャルルの法則，ボイル・シャルルの法則をそれぞれ適切に用い，気体の圧力や体積，温度を求めることができる。 c:ボイルの法則，シャルルの法則，ボイル・シャルルの法則をそれぞれ適切に用い，気体の圧力や体積，温度を求めることができる。			
		2.気体の状態方程式	a:気体には理想気体の状態方程式が成り立つことを理解する。理想気体の状態方程式を用いることができる。 b:理想気体の状態方程式を応用することで気体の分子量や密度を求めることができることを理解する。理想気体の状態方程式から気体の分子量や密度を求めることができる。 c:理想気体の状態方程式から気体の分子量や密度を求めることができる。			

※令和４年度以降入学生用

		3.混合気体の圧力	a:分圧の法則について理解する。分圧と体積やモル分率の関係を理解する。混合気体の分圧や全圧を求めることができる。 b:モル分率を用いた平均分子量の考え方を理解し，モル分率を用いて平均分子量を求めることができる。分圧の考え方を用いて，水上置換で捕集した気体の分圧を求めることができる。 c:混合気体の考え方に興味をもつ。			
		4.実在気体	a:理想気体と実在気体の違いについて理解する。 b:理想気体と実在気体の違いに基づき，実在気体を理想気体に近づける判断することができる。 c:実在気体とその取扱いについて興味をもつ。			
	第４章　溶液	1.溶解とそのしくみ	a:水和という現象を理解する。水への溶解には分子の極性の有無が関係していることを理解する。 b:物質を電解質や非電解質に分けることができる。分子を極性分子と無極性分子に分けることができ，水への溶解の可否を判断できる。 c:物質の溶解とそのしくみについて興味をもつ。			
		2.溶解度	a:飽和溶液において成立する溶解平衡について理解する。溶解度や再結晶について理解したうえで，水和水をもつ物質の溶解量に関する考え方を理解する。気体の溶解に関するヘンリーの法則について理解する。 質量モル濃度について理解したうえで，その値を求めることができる。 b:水和水をもつ物質の溶解量を求めることができる。ヘンリーの法則を用いて，気体の溶解量を求めることができる。質量パーセント濃度やモル濃度，質量モル濃度を適切に用い，濃度の換算をおこなうことができる。 c:固体および気体の溶解度に関して興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

		3 希薄溶液の性質	a: 希薄溶液には，蒸気圧降下，沸点上昇，凝固点降下，浸透圧という現象が起こることを理解する。希薄溶液におけるこれらの現象は，溶質の種類に関係なく，溶質の粒子数（質量モル濃度）にのみ依存することを理解する。冷却曲線と過冷却という現象について理解する。 b: 沸点上昇度と質量モル濃度の関係について理解し，式を用いて計算をしたり沸点上昇度の大小を判断したりできる。凝固点降下度と質量モル濃度の関係について理解し，式を用いて計算をしたり沸点上昇度の大小を判断したりできる。沸点上昇や凝固点降下を利用することで分子量を求めることができることを理解し，その値を求めることができる。浸透圧とモル濃度，絶対温度の関係（ファントホッフの法則）を理解し，それを利用することで分子量を求めることができる。 c:希薄溶液の示す現象について興味をもつ。			
		4.コロイド溶液	a:コロイドとコロイド溶液およびその分類について理解をする。コロイド溶液が示す特徴的な現象について理解する。親水コロイドと疎水コロイドの沈殿について理解する。 b:コロイド溶液に起こる現象から，そのコロイドの性質や特徴について判断できる。塩析と凝析の違いについて説明できる。保護コロイドについて説明できる。 c:コロイドの起こす現象や身近なコロイドについて興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

	第１編　物質の変化 第１章　化学反応とエネルギー	1.化学反応と熱	a: 化学反応に伴って放出または吸収する熱量をエンタルピー変化を用いて表すことを理解する。発熱反応，吸熱反応とエンタルピー変化ΔH の正負の関係を理解する。エンタルピー変化を付した反応式とエンタルピー変化を表した図を理解し，それぞれを作ることができる。反応エンタルピーの種類を理解する。反応エンタルピーの実験的な測定方法について理解する。 b:反応エンタルピーの種類を判断することで，エンタルピー変化を付した反応式を書いたり，反応エンタルピーを求めたりすることができる。 c:化学反応に関わるエンタルピー変化に興味をもつ。			
		2.ヘスの法則	a:ヘスの法則を理解する。結合エネルギーの定義について理解する。 b:pH の値から酸性、塩基性の強弱が判断できる。水素イオン濃度と水酸化物イオン濃度の関係を用いて、水酸化物イオン濃度から pH を求めることができる。 c:水もまた一部が電離しているということに興味をもち、主体的に取り組んでいる。			
		3.化学反応と光	a:化学反応には，光を放出または吸収するものもあることを理解する。光が関わる具体的な化学反応や現象を理解する。 b:光が関わる化学反応や現象について，エンタルピー変化の正負や反応名，現象名が判断できる。 c:化学反応に伴う光の放出や吸収について興味をもつ。			
	第２章　電池と電気分解	1.電池	a:電池のしくみとダニエル電池について理解する。電池のしくみに基づいて鉛蓄電池，燃料電池の構造や両極で起こる反応式について理解する。実用電池の具体例をその種類（一次電池または二次電池）を含めて理解する。 b:鉛蓄電池や燃料電池の構造に基づき，それぞれの電池で起こる現象が判断できる。電池の両極での反応式を用いて，物質量などの量的な計算ができる。 c:電池について，その構造や両極で起こる反応，現象に興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

		2.電気分解	a:陽極で酸化反応が，陰極で還元反応が起こることを理解する。水溶液の電気分解において陽極および陰極で具体的に起こる反応を理解する。ファラデーの法則を理解する。電気分解の工業的な利用について，その具体例を理解する。 b:ある電解液を電気分解した際に陽極および陰極で反応する物質や発生する物質を判断できる。ある電解液を電気分解した際の陽極および陰極での反応を反応式で書くことができる。ファラデーの法則に基づき，電気分解の量的関係の計算ができる。 c:電気分解およびその工業的な利用について興味をもつ。			
３学期	第３章　化学反応の速さとしくみ	1.化学反応の速さ	a:化学における反応速度の定義を理解する。実験結果から反応速度を求める方法を理解する。 b:反応速度の定義に基づいて，反応速度を求めることができる。実験結果を適切に処理し，反応速度を求めることができる。 c:反応速度について興味をもつ。	小テスト	小テスト レポート	探究活動 レポート 振り返り
		2.反応条件と反応速度	a:反応速度が速度定数とモル濃度を用いて表せることを理解する。反応速度式のモル濃度の係数は実験によって決まることを理解する。実験結果から，速度定数を求める方法を理解する。反応速度に関わる要因として，温度，濃度，触媒があることを理解する。触媒について，その役割や具体例，酵素が触媒であることを理解する。 b:反応速度式を用いて実験結果の処理などを行い，反応速度や速度定数を求めることができる。反応速度に関わる条件に基づき，条件を変えることで反応速度がどのように変化するのか判断することができる。 c:反応速度に関わる反応条件について興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

		3.化学反応のしくみ	a:活性化エネルギーについて理解する。活性化エネルギーの大小と反応速度の関係について理解する。活性化エネルギーと触媒や温度の関係について理解する。 b:触媒を用いる反応速度が大きくなる理由を，活性化エネルギーを用いて説明できる。温度を大きくすると反応速度が大きくなる理由を，活性化エネルギーを用いて説明できる。触媒を用いた際に反応エンタルピーがどのようになるか判断できる。 c:化学反応のしくみと活性化エネルギーを用いた考え方に興味をもつ。			
	第４章　化学平衡	1.可逆反応と化学平衡	a:可逆反応，化学平衡，平衡状態の考え方を理解する。化学平衡の法則を理解し，与えられた反応の平衡定数を濃度を用いて記述することができる。固体が含まれる反応の平衡定数の書き方を理解し，その平衡定数を濃度を用いて記述することができる。液体どうしや気体どうしの反応における平衡定数の書き方を理解する。 b:平衡定数を用い，化学平衡における量的関係を求めることができる。 c:化学平衡とその考え方に興味をもつ。			
		2.平衡状態の変化	a:ルシャトリエの原理について理解する。濃度，圧力，温度を変化させた際に平衡がどちらに移動するか理解する。触媒を用いた際に平衡がどのように変化するか理解する。平衡移動の考え方の工業的製法への適用について理解する。 b:濃度，圧力，温度を変化させた際に平衡がどちらに移動するか，ルシャトリエの原理に基づいて判断できる。 c:化学平衡における平衡移動について興味をもつ。			

※令和４年度以降入学生用

		3.電解質水溶液の化学平衡	a:電離平衡及び電離定数，水のイオン積について理解する。電離度や電離定数を用いて，水素イオン濃度や pH を求める方法を理解する。弱酸，弱塩基の遊離と塩の加水分解について理解する。緩衝液の性質について理解する。難溶性塩の水溶液中の平衡および溶解度積という表現について理解する。共通イオン効果について理解する。 b:電離度や電離定数を用いて量的計算を行い，水素イオン濃度や pH を求めることができる。弱酸や弱塩基の遊離において起こる現象を判断することができる。塩の加水分解の反応式を書くことができる。溶解度積を用いて量的計算を行うことができる。 c:電離平衡およびそれに関わるさまざまな現象について興味をもつ。			

※　表中の観点について　a:知識・技能　b:思考・判断・表現　c:主体的に学習に取り組む態度